



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	メッセージングプログラムを利用した外国語指導：日本語指導を例に
Author(s)	山下, 好孝
Citation	高等教育ジャーナル, 10, 93-100
Issue Date	2002
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.10.93
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29668
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P93-100.pdf



メッセージングプログラムを利用した外国語指導 ー日本語指導を例にー

山下 好孝^{*}

北海道大学留学生センター

Teaching foreign languages with Instant Messenger Programs - An example from Japanese

Yoshitaka Yamashita^{**}

International Student Center, Hokkaido University

Abstract — This article reports on the use of Instant Messenger Programs to teach foreign languages. While the use of information technology (IT) is of great importance these days, few attempts have been made to introduce it to university language classes. To use IT in language classes requires much preparation time from teachers, and at the moment we cannot expect much effect for the use of IT. As one attempt at introducing IT in language classes I have used Microsoft's MSN Messenger in my Japanese lessons. Students exchanged messages in Japanese using this program and improved their communication ability in the language. This article presents the details of class activities.

(Received on February 25, 2002)

1. はじめに

コンピューターやインターネットを利用した語学教育が脚光を浴びている。いわゆる IT (インフォメーション・テクノロジー) を利用した E ラーニングである。従来の対面型の語学教育に比べ、より効果的に、より多くの受講者を教育出来るというのが、その謳い文句である。

だが、本当にそうなのであろうか。確かにデモンストラーションされる教材は、彩り豊かなマルチメディア素材を利用し、学習者の興味を引く。しかし、

それらを利用するにはかなり整った施設、機器類が必要なのは言うまでもない。さらに、たとえ面白い教材が出来たとしても、何度も同じものを見せられたら学生達は飽きてこないだろうか。飽きないようにさせるには質の高い教材を多数準備する必要がある。そして、もしそのマルチメディア教材を現場の語学教官が作成しなければならないとすると、かなりの時間と労力が犠牲になる。

IT を語学教育の教官が導入したいと思ったとする。それは、端的に言って、IT を導入することで楽をしたいからなのである。かつて日本語、特に漢字を手で書

^{*} 連絡先：060-0808 札幌市北区北8条西8丁目 北海道大学留学生センター

^{**} Correspondence: International Student Center, Hokkaido University, Sapporo 060-0808, JAPAN

くよりワープロを使った方が楽なため、日本でワープロが普及した。ワープロよりパソコンを使うほうが編集や検索が楽だということで、パソコンが普及したのだ。

それと同じ論法でEラーニングは普及するだろうか。下手をすれば労働強化につながるかも知れないのだ。そのような条件下では、ITは普及するとは考えられない。たとえITを導入したとしても、Eラーニングを実現するためにかけるコストに見合った教育上の効果が得られるのか確かな証拠もない。古今東西もっとも効果的な語学の授業は、やはり少人数を対象とした対面形式の授業であることは否定出来ない。

しかしながら、21世紀を迎えた今、以上のような懸念はあるにせよ、ITを導入して「楽をする授業」を展開する可能性を考える時期には来ていると思う。以下の章ではITを応用したEラーニングのメリット、デメリットについて考察してみよう。

2. Eラーニングのメリット、デメリット

2.1 メリット

2.1.1 学習者側から

学習者側からは、いつでも、どこでも、好きなだけ、語学の勉強が出来るという点がまずあげられるであろう。必要な資料はすべてウェブページ上で語学教官が提供してくれる。図書館や本屋に本を探しにいかなくてもいい。テストは何回でも受けられるし、好きなときにテストが受けられるといったメリットが生まれるだろう。教官にはいつでも電子メールで質問出来るし、自宅にインターネットに接続出来るパソコンがあれば、学校に行かなくてもいいことになる。

2.1.2 教官側から

教官側とすれば、一度準備した教材が何度も使えることに最大のメリットを見いだすのではないだろうか。教官の自宅にインターネットに接続出来る環境があれば、学校に行かなくてもいい。多人数を相手に、実際に教室に張り付かないで、自宅からでも講義が出来る。採点、成績評価という仕事をパソコンに任せられれば、かなりの楽が出来るであろう。

2.1.3 学校経営者側から

大学の経営者側立ってみると、ITの導入でコスト削減が図れるであろう。かつてのようにパソコンはそれほど高価なものではなくなってきている。学校側がコンピューター室を用意しなくとも、学生が一人一台所有する時代になりつつある。学生を実際の大学の教室ではなく、インターネット上のキャンパス(サイバーキャンパス)で受け入れるとなると、施設を作らなくてもいい、教室を確保しなくてもいい、食堂や付属施設をつくらなくてもいい、教官にたくさんの学生の面倒をみさせられる等のメリットが生まれる。

2.2 Eラーニングのデメリット

2.2.1 なりすまし

パソコン、インターネットを利用した教育では、本当にその学生が受講しているのかという「本人の認証」に関する問題がまず念頭に浮かぶ。いわゆる「なりすまし」によって別の人間が講義に参加しているか、もしくは本人であっても参加しているふりををして実際にはパソコンの前には座っておらず、別のことをしているという状況が起こりうるのである。

2.2.2 成績評価

さらに、学生の成績評価の問題がある。四択問題のよう単純な問題をクイズ(小テスト)や試験に出すなら、パソコンが自動的に成績を出してくれるであろう。しかし、語学教育では翻訳や作文など機械では到底採点出来ない課題も含まれる。さらにそれらを講義の中でフィードバックするとすると、機械に頼るわけにはいかない。

また講義の中での学生達のパフォーマンスはどうやって測れるだろうか。語学では、書いたもの以外に、発音したものが評価の対象となる。学生の発話を聞いて評価を下せる機械はまだ寡聞にして聞かない。結局は、放送大学などと同じくスクーリングをして従来型の講義と組み合わせるしかないのだろう。

2.3 見通し

IT技術は主役にはなれない。あくまでもIT技術は道具なのであるから、それを大学教育の中で「道具」としてどう組み入れるか考えることが重要である。

Eラーニングには上で述べたような問題が山積みである。他のさまざまな批判もある。しかしそのような批判があったとしても、ITを語学教育に活かせる道

を探ることは必要だと考える。実現しそうな理想を追い求めるものではなく、現実とニューテクノロジーの妥協点を見だし、その活用の方法を本稿では考えてみたい。

3. 実践報告

3.1 「日本語」

筆者は、北海道大学全学教育の中で1年に在籍する外国人留学生を対象とする日本語 という講義を週2コマ担当している。火曜日と金曜日の午前8時45分から10時15分までの90分の講義である。

学部1年に入学する留学生の日本語能力は、入学当初からかなりの「ばらつき」がみられる。理想的には、能力別の日本語の講義を開講出来ればいいのだが、予算的な問題でそれは出来ていない。能力差があると、教室でのパフォーマンスにそれが大きく反映される。よく日本語が出来る学生は発言が多いのに対し、出来ない学生は黙っていることが多い。しかし、レポートなどを提出させると、口頭でのパフォーマンスが悪い学生でも、書き言葉ではいい評価を受ける場合がある。日本語能力だけの問題ではなく、教室での行動様式が文化によって異なることも、影響を与えているのかもしれない。つまり、授業中は先生の言うことをよく聞いて黙って聞いているのがいい学生だと評価する文化と、積極的に自分の意見を、たとえ間違っていたとしても発表する学生の方が高い評価を受ける文化との違いである。

3.2 チャットの利用

そこで筆者は実際の教室ではなく、インターネット上で日本語で意見の交換を留学生たちにさせることを思いついた。日頃、教室では物静かな学生も、チャットの画面ではさかんに意見を述べるということがよくある。実際のコミュニケーションの場ではない、バーチャルなコミュニケーションの場で、日本語の「発話」を経験させようというのである。

そのためには、受講生にパソコン上で、まず日本語入力の仕方もマスターさせなければならない。日本語Iの受講生たちには、学期の早い時期に日本語ワープロソフト使用の実習をうける機会を設けた。(ワープロの指導に関しては稿末資料を参照)日本語入力が全員出来るようになった後、どのプログラムでチャットをさせるか検討した。多くの学生が

hotmail.comのアドレスを取得していたので、同サイトを経営するMicrosoft社が無料で提供するMSN Messengerを利用することにした。hotmailの利用者であれば、おなじユーザー名、パスワードでMessengerを利用出来る。オペレーティング・システムが日本語以外のバージョンでも日本語フォントと入力ソフトをインストールすれば日本語でのやりとりができる。また同プログラムは、ウィンドウズ版とマッキントッシュ版があるので、多くのパソコンで使用出来るというメリットがある。同プログラムおよび日本語フォント・入力プログラムはマイクロソフトのウェブページからダウンロードできる。(http://messenger.msn.co.jp)

3.3 メッセンジャーの長所

従来のチャットプログラムはチャットのサイトにまず入り、そこにいる人とチャットを行う。いわばオープンなチャットであり、まったく面識のない人間とコミュニケーションすることもある。インスタントメッセンジャーの一種であるMSN Messengerでは、通信出来る相手をあらかじめ登録しておかなくてはならない。つまり「クローズドな」システムで、見知らぬ人間の無意味なメッセージで煩わされることはない。

授業では担当教官が受講生のhotmailのアドレスをあらかじめ把握し、それをもとに学生達をチャットのメンバーとして登録しておく。こうしておけば、受講生たちがMSN Messengerにログオンした段階で、担当者のパソコン画面に通知される仕組みになっている(図1)。

3.4 実際の使用

担当者は、その日のディスカッションの課題をあらかじめ電子メールで学生に送付しておく。一人の学生にそのテーマに関して、他の学生に日本語でインタビューさせる。インタビューされたほうも日本語で答えを返す。これが講義時間中の活動である。学生は辞書を引いたり隣の学生に助けを求めたりしながら、日本語での会話を続けていく。分からない漢字や言い回しを相手が使ったときは、その語句の部分をコピー、貼り付けをして、相手に説明を求めることもできる。

学生がログオンしたことを確かめてから、どの学生が別のどの学生にインタビューして質問するかを



図 1. MSN Messenger の画面

指定する。多くの場合、ログオン順に学生を組み合わせるが、学生間の日本語力の差を考慮して組み合わせを決めることもある。日本語能力の劣る学生と、日本語能力の優れた学生が組合わさってチャットを始めた場合、両者の発言量にかなりの差が見られることがあるし、発言をタイプする時間にも差が出てくる。そのような問題が実際に出てきたので、一人の学生に、それぞれ二人ずつとチャットさせるようにした。返答待ちの時間に、もう一人と意見を交わしたり出来るからである。二つの対話は別々のウィンドウに表示される。一方では質問する方にまわり、他方では質問される方にまわる。こうすることで講義の時間が有効に活用できた。

3.5 日本人ボランティアの活用

この形態の授業活動では、日本人の協力を得ることも可能である。クラスで一番よくできる学生には、日本人とチャットさせた方がいいと思うが、それ以外の学生にも見知らぬ日本人とコミュニケーションさせることは重要である。協力してくれる日本人には学生からの質問に日本語で答える役目をあらかじめ

めお願いしておく。レベルの低い学生を相手する場合には、「漢字(かんじ)」のように漢字にルビを加えることもお願いした方がいい。また、この方式だと、ボランティアの日本人の参加も得やすい。インターネットにアクセス出来る環境にあれば、自宅にいても協力可能だからである。その際、あらかじめその日本人ボランティアの方の ID を授業担当者が登録しておく。ログオンした段階で日本語学習者をそれぞれに割り当てる。一度に 3 ~ 4 人の学習者の相手をしていただくことも可能である。

この種の授業を始めた当初は、組み合わせる相手の ID を他方に教え、それを自分の「友人」として登録させるようにしていた。現在ではログオンした学生にまず教官からアクセスし、そのチャットのウィンドウズに別の学習者ないしは日本人に加わってもらうようにしている。このようにした場合、チャット参加者の ID は担当者のパソコンには残っているけれども、受講生ないしはボランティア日本人のパソコンには、チャット終了後何も残らないことになる。もちろんチャット参加者が合意した場合は、それぞれの ID をお互いのアカウントに登録し、

授業後もコンタクトを取ることも可能である。

3.6 会話記録の保存

MSN Messengerの場合、チャットのやりとりはすべて画面上に残っている。授業時間の最後にそれをコピーし、電子メールに貼り付けて担当者に送付するよう指示した。担当者がチャットの参加者として残っている場合は、担当者のパソコン画面上でも受講者のやりとりをモニターできる。その場合は、担当者がチャットのログ(記録)をコピーしてファイルとして保存できる。

3.7 フィードバック

担当者は受け取ったログを元に、受講生に対してフィードバックを行う。理想的には、ログを提出した一人一人につきコメントを付して、メールで返信するのが最も望ましい形態であろう。しかし、それでは膨大な時間が必要となる。一人一人が意見を聞いたり、書いたりするチャットという不定形な活動の中で、パソコンにフィードバックをまかせることは、現時点では無理である。

私の場合、チャットの授業を受け持つたびに、その中の会話を一つ選んで通常の授業時間にフィードバックするようにしている。提出されたログのプライバシーに関わる部分を改変し、受講生の数だけプリントアウト、もしくはOHPシートに印刷し、授業時間に提示する。それを元にコメントしたり、学生にコメントさせたりする。

3.8 問題点

ここに述べた方式だと、担当者は研究室にいたまま授業が出来ることになる。だが、実際には受講者からパソコンの操作法についての質問が出たり、機械の不具合が出たりしてパソコンが置かれている部屋に出向くことがよくあった。しかし、パソコンに慣れた学生の場合は、自宅や図書館などからもアクセスして授業に参加した。筆者の場合、わずか12名前後のクラスであったが、機械がらみのトラブルがよく発生し、その対処にけっこう時間的に拘束された。これが50～100人の規模になったら、助手がいないと運営出来ないと思う。受講生が増えた場合にはフィードバックの仕方も工夫する必要があるだろう。

3.9 他の外国語への応用

筆者の実践は日本語に限られていたが、他の外国語にも応用できると思う。例えば日本の大学でドイツ語やスペイン語などを学ぶ学習者に同様の活動をさせるのである。そのような場合には、独和、和独、西和、和西などの辞書を手元に持たせて、時間をかけてもいいから、それぞれの外国語で短文を書かせることになる。外国語の場合も最初は学習者間でチャットすることになるが、最終的にはネイティブスピーカーとチャットさせることを目指すべきである。しかし、そのような活動にボランティアとして参加してくれるネイティブスピーカーを日本で多数調達することは難しい。その際にはOdigoというソフトが便利であろう。(http://www.odigo.com) OdigoはMSN Messengerとは異なり、不特定多数を相手にするオープン型のチャットプログラムである。そのプログラムではプロフィールを元にチャットする相手を検索する。たとえば20歳代、女性、ミュンヘン在住、ドイツ語使用といった条件で検索すると、現在ログオンしているユーザーが表示される。良さそうな相手を選んでこちらから話しかける。運がよければすぐ返事が返ってくるが、全く無視される場合もある。そのときは別の相手を探すしかない(図2)。

Odigoを語学の授業に導入する際は、担当者によるコントロールがMSN Messengerの場合のようにはいかない。学生の自主性に任せるしかないが、それでもログを担当者に提出させることはできる。

3.10 総括

さてチャットを授業に導入することでどんなメリットがあっただろうか。

最初に考えた「教師が楽を出来る」という面ではどうだろうか。率直に言って、それほど楽にはならない。フィードバックや学生の評価には従来の対面型の語学授業と同様の手間がかかる。対面型の授業も平行して行わなければ効果がないと思われる。

しかし、学生に対する動機づけにはかなりの効果があったと思う。学んだ言葉を使ってコミュニケーションができるというのは学習者に大きな喜びを与えるものだ。キーボードを使うことで、書くことがそれほど苦痛ではなくなったという意見も外国人留学生から出された。

また日本語の場合、ローマ字から平仮名へ、平仮名から漢字へ変換するというプロセスの中で、正しい発音を身につけさせるという副産物もあった。中国



図 2. Odigo の検索画面

語話者や韓国語話者は往々にして清音と濁音を混同する。また日本語学習者の困難な点として、促音や長音の習得ということがある。これらの音声的な知識が、漢字変換に反映されるのである。正しい発音を意識的に身につけ、区別をちゃんとしていないと、正しい入力が出来ない。英語学習者の場合、もう少し楽かも知れない。多くのワープロソフトには英文スペルチェックのプログラムが付属している。それらを活用することで、気楽に英文が入力できると思う。そのようなものがチャットプログラムでも利用出来ればいいのだが、現状ではまだない。英文を自動訂正するワープロソフトで入力し、入力したものをチャットの画面に貼り付けるというやり方も考えられる。r

と1の区別など、日本人には苦手な音の区別も音の違いを意識しながらキー入力することで、改善が見られるのではないだろうか。

4. おわりに

ニュー・テクノロジーの不備を指摘することは比較的簡単である。しかし、ニュー・テクノロジーをまず使用してみて、その利点、欠点を把握した上で、利用できる部分はどんどん利用するというのが現在の教育の現場にふさわしい態度なのではなかろうか。そこから新たな語学教育の可能性が開けてくると強く信じる。

資料 1. 外国人日本語学習者のためのワープロ指導教材例

00/07/05 ワープロ・コンピューター実習 課題

名前 _____

大学 _____

\$1. つぎのひらがな / カタカナのことばをコンピューターで書いて下さい。

Type the following Hiragana/Katakana words

example 例) たまご → たまご

つくえ →

くるま →

しけん →

けんきゅうしつ →

(後略)

\$2. 次の漢字の言葉をコンピューターで書きなさい。

Type the following Kanji words

example 例) 食べる to eat → 食べる

家族 family →

雨 rain →

火曜日 Tuesday →

来週 next week →

(後略)

§ 3 . テ形を書きなさい。Write the te-form of each verb.

example 例) たべる 食べる → 食べて

ある 有る →

いる 居る →

かう 買う →

はじまる 始まる →

いく 行く →

くる 来る →

のむ 飲む →

(後略)

\$4. 質問に答えなさい。Answer the questions

あなたは何語が話せますか。 →

あなたはお酒が飲めますか。 →

カタカナが書けますか。 →

日本の歌が歌えますか。 →

何メートル泳げますか。 →

日本語で電話がかけられますか。 →

(後略)

\$6. 例のように書換えなさい。

example 例) 私は電気をつけました。 → 電気がついています。

私は窓を開けました。 →

私は椅子を壊しました。 →

私はコップを割りました。 →

私は袋を破りました。 →

(後略)